巻頭特集 美しい編み目に込められた未来

飯田水引プロジェクトの挑戦

熨斗袋に蝶結びされた紅白の紙紐――。水引と聞いて思い浮かぶのは、冠婚葬祭の必需品ではないでしょうか。水引の魅力を発信する「飯田水引プロジェクト」は、そんなイメージを変える、新たな製品を生み出しました。

元結の衰退がきっかけで開始 水引生産を支えた家庭内職者

平成26年に長野県の伝統工芸品として認定された「飯田水引」。飯田市の地場産業へと発展した歴史を顧みると、始まりは江戸時代に起こった「地場産業の危機」がきっかけでした。

楮（こうぞ）が豊富に採れた飯田地方では、製紙業が発達。水に濡れても丈夫な「飯田台帳紙」は、美濃和紙で有名な尾張藩にも移出されていました。さらなる商品価値を生むべく、1672年には飯田藩主・堀美作守親正（ほりみさかのかみちかまさ）が元結業を推奨。地元の和紙を用いた生産が盛んになります。

「飯田元結の祖」といわれるほど、重要な役割を果たしたのが桜井文七です。文七は切れやすく扱いにくかった元結の完成度を高めることに成功。江戸で販売したところ好評を博し、「文七元結（ぶんしちもっとい）」としてもてはやされました。

しかし、1871年の断髪令を境に需要が激減。行き詰った元結業界は、ほぼ同じ工程で作れる水引に注目します。元結に改良を加えて光沢のある丈夫な水引を製造し、活路を見出しました。昭和40年以降には製造を機械化するなど、その後も革新を続けながら発展。最盛期には、生産額が90億円にのぼりました。

圧倒的な生産量を支えたのが家庭内職者です。水引の生産は完全分業制。生水引の生産、加工部品の製造、組み立てと、工程によって担当者は異なります。用途に応じて生水引を加工・細工したのが、地域の女性たちでした。ピーク時には1社につき、200～300人の内職者を抱え、遠くは岐阜県瑞浪市や下呂市の近くまで部品の回収に回ったといいます。家に帰れば、母親が水引を手に「おかえり」と迎えてくれる――。そんな光景を懐かしく感じる人も、少なくないでしょう。

▲飯田水引プロジェクトの皆さん。左から、飯田商工会議所の井坪伸治さん、水ひき工芸館せきじまの店長・唐澤佳洋さん、株式会社カラサワ代表取締役の唐澤秀宣宣さん、株式会社喜久優代表取締役社長の渡邊浩平さん、有限会社関島水引店代表取締役社長の関島正浩さん。現在は4社がメンバーとして所属しています

水引×アクセサリーで 新たな可能性を拓く

現在も、国内で生産される水引の約7割を飯田地方で生産。国内屈指の産地として確かなポジションを築いているものの、結納など伝統様式の簡素化や、海外の廉価品との競合などの影響を受け、停滞しつつある業界に危機意識が高まっています。

そんな状況を変えるべく、2004年に始動したのが「飯田水引プロジェクト」。飯田市鼎商工会（現・飯田商工会議所）の呼びかけのもと、中小企業庁が実施する「JAPANブランド育成支援事業」の一環として始まりました。日本の伝統文化として、欧米で新市場開拓を目指す目標に賛同し、市内の水引企業約20社が協力。同年8月にアメリカで市場調査をした後、10月にはギフト商品の見本市として全米最大級の規模を誇るカリフォルニアギフトショーに参加しました。

和の雰囲気が漂う梅、兜といった工芸品や、ワインボトル飾り、ナプキンリングなど実用的な小物を出品。製品を際立たせるため、陳列棚や壁面を黒色にしたほか、編み込み作業を実演するなど、展示方法にも気を配りました。

有限会社関島水引店の関島正浩さんは、「色付きのワイヤーという認識が強いようでしたが、ハンドメードだとわかると、その技術の高さに関心を持ってもらえました」と振り返ります。海外進出に可能性は感じたものの、日本の文化として海外に進出するには、まず国内でのブランド価値をしっかり固める必要があると実感。2006年9月にパリ市内で展示会を開いて以降は、国内へと目線を向け始めます。

2007年度には、国内の展示会やワークショップ、トークショーなどの企画に8回参加。JAPANブランド育成支援事業で生み出された製品が一堂に会する「JAPANブランドエキシビジョン in TDC」では、水引を額装した「コレクションボックス」など、紅白を基調とした作品を出品します。美術性に主眼をおいた作品は話題を呼び、「JDCA特別賞」を受賞しました。

▲今年2月に行った竜丘小学校での水引教室。「男の子は編み込む本数、女の子は色にこだわりを持つ傾向にあります。集中しすぎて、給食を食べる時間まで作業をする子もいますよ」と関島さん

今年2月から動き始めたのが、株式会社ポーラと、デザイナー加藤尚子さんとのコラボ作品です。加藤さんは徳島の阿波藍や岐阜の飛騨春慶、一位一刀彫など、地域固有の素材を生かした作品企画に携わってきました。以前から飯田水引の技術の高さに着目しており、「新たな魅力を引き出すジュエリーを」と話を持ちかけました。

でき上がったのは、チョーカーやネックレス、ピヤスなど、全30種類。9月14日～20日には、東京銀座にある「ポーラ ザ ビューティ銀座店」で初披露を迎えました。

ワイヤーに水引約20本が織り込まれたチョーカーは、市松模様が浮かぶレトロモダンなデザイン。多色使いで、虹を描くように編まれたネックレスは、結び目の細かさに圧倒されます。「ネックレスは1つ作るのに40時間。原画のデザインをどうやって再現するかを考え、なおかつ完成度を高めるのは大変な作業でした。あらためて飯田水引の技術の高さを感じました」と胸を張ります。

展示会が終わった後は、完全生産品として販売をしていく予定。水引がアクセサリーとして受け入れられていくか、飯田水引プロジェクトは期待を寄せています。「結納離れが進んでいる今日は、断髪令のとき以上のピンチ。苦境を打開した先人を見習って、新たな販路を開拓していきたい」。冠婚葬祭の必需品からアクセサリーへ、さらに今後飯田水引がどのような分野と縁を結ぶのか、プロジェクトの挑戦は続きます。

◀阿波藍染め＋飯田水引藍染め あわじむすびバック

阿波藍で染められたバックの中央を飾るのはあわじ結び。よく見ると上下、左右へ、切れ目なく結ばれているのがわかります

▲オブジェリーデザイン 水引ループバック

曲線の美しさが光るループバック。カーブする部分だけしぐくことで、水引が折れないようにしています

▲藍染め水引淡色チョーカー

市松模様のチョーカーは、黒のワイヤーにピンクの水引の組み合わせなど、鮮やかなカラー展開もあります

▼水引レースイヤリング

レース模様が浮かぶシリーズは、イヤリングのほかネックレス、コームがあります

【9月14日に公開されたばかりの作品】

INFORMATION

飯田水引プロジェクト

住所

飯田市常盤町41
（飯田商工会議所）

電話番号

0265-24-1500

WEB

http://japan-mizuhiki.com/

文／髙﨑千紗登　水引アクセサリー商品デザイン・商品写真提供／加藤尚子　デザイン／平光麻祐子